



茅陽一氏からのご意見

地球環境問題は、「持続可能性」の問題であることの再認識を

経済学者ハーマン・デイリーが20年前から提唱している3原則があります。1つ目は、再生可能な資源を利用した場合、使用した分を補うための拡大をすること。例えば、森林を伐採した際にはその分植林するというようなことですが、現実には世界的な森林減少が起きている。2つ目は、非再生資源を消費した場合、できれば再生可能な資源を開発して、その資源の使用量を上回る供給をすること。特に化石燃料の消費に対して再生可能資源を開発することが考えられますが、現状では電力供給のための原料は6割以上が化石燃料であります。3つ目は、廃棄物を排出する場合、自然環境の吸収能力の範囲を超えてはならないこと。CO₂の濃度について言えば、産業革命以前よりも25%増加している。いずれも現実のこの世界では、この原則は満たされておらず、われわれはよく考えて、持続可能な社会をもう一度作り直すための努力をすべきだと思います。



茅陽一氏
 (財)地球環境産業技術研究機構副理事長
 《専門分野》環境・リサイクル全般

産業界の責任と3Rの重要性

- 持続可能性の問題は人類全体の問題ですが、廃棄物、使用エネルギーや資源は圧倒的に産業界が多いことは事実です。持続可能性を回復するためには、やはり産業界が旗振り役として実行することが大事なことだと思います。
- その中でもやはり大事なのが3R。特にリサイクルは大きく2つに大別することができ、1つは製品の再資源化、もう1つは自社内での還元ではなく他の製品に使用してもらうこと。まさに伊藤園の茶殻リサイクルシステムはこれに該当し、食品産業で抱える課題においても非常に意義が高いと思います。

茶殻リサイクルシステムへの今後の期待

- 茶殻には「よい香り」「消臭性」「抗菌性」などの特性があり、捨てるのはもったいない。この特性をうまく利用するというだけで私は大変意味のあることだと思います。
- また、茶殻の持つ資源としての効用。できるだけ引き出して使用すべきことは当たり前ですが、やはり持続可能性を高めるためには資源の効用を引き出すことが非常に大事なことです。
- 今後もこの茶殻リサイクルシステムでは、資源の有効活用という観点からいえば、畳やボードなど寿命の長い製品にリサイクルするほうがいいとも言えます。さらにはできるだけ持続可能性にプラスになるような効用を探索して欲しいと思います。

伊藤園の対応

茶殻リサイクルシステムの最新動向

茶殻の特性である「抗菌性」や「消臭性」を活かし、自動販売機横のPETボトル回収ボックスのプラスチックに茶殻を入れ込み、全国の自動販売機に展開します(笹谷)。

茶殻のその他の使用法や特性

- 土木・農業分野などで使うという道もあり、さらに茶殻を活用していきたいと思っています(橋本)。
- 例えば、畳ボードについては、茶殻を入れたボードの強度面では、普通のボードと変わらない強度、JISで規格された強度を上回る強度も得ています(安倍)。